

# 研究歴比較のためのエゴセントリックタイムライン

Egocentric timeline for comparison of researchers' histories

鈴木 聡<sup>\*1</sup>      武田 英明<sup>\*2</sup>  
Satoshi V. Suzuki      Hideaki Takeda

<sup>\*1</sup>青山学院大学      <sup>\*2</sup>国立情報学研究所  
Aoyama Gakuin University      National Institute of Informatics

It has been inevitable for researchers to design their own careers considering diverse career paths, since post-doctoral research posts for researchers in Japan have been decreasing for these years. Then, we have been developing *egocentric timeline* to enable such researchers to design their careers taking into account research histories of other researchers. In the egocentric timeline, life events of a user and another researcher are aligned based on user's age instead of absolute age. The egocentric timeline can enable the user to consider the thought toward career path of other researchers easier than other timeline interfaces. We investigate the possibility of the egocentric timeline in researchers' career design with an experiment to compare other timeline interfaces, upgrade in generation of the timeline, and acquisition of research histories from researchers who have just succeeded in acquiring research and non-research jobs.

## 1. はじめに

研究者のキャリアデザインを考える上で、研究者は自分自身で進路のデザインを行う必要があることを前提とする必要がある。政府は1991年から大学院生倍増化計画を打ち出し、これに伴い大学院進学者は増加したが、彼らの就職先となる研究職のポストは減少傾向にあり、企業としても大学院出身者を即戦力として扱づらいという現状がある [濱中 07]。しかし、若手研究者側としてもこのような現状を踏まえ、自発的に研究職以外の選択肢も視野に入れたキャリアデザインを行う姿勢も必要とされている [濱中 07]。このように、今後多様化するであろう若手研究者のキャリアパスを考慮し、研究者のためのキャリアデザインへの介入が求められる。

著者らは、研究者が自身のキャリアデザインを独力で行うために、他の研究者の進路と自身の進路との比較を通じて、キャリアデザインが行えるツールの開発を行っている [鈴木 07]。他の研究者の進んだ進路、および置かれた状況をテキスト化したものを本研究では**研究歴**と呼ぶ。そして、他の研究者とユーザ自身の研究歴の比較を、ユーザの年齢を時間軸にしたタイムラインである**エゴセントリックタイムライン**を通じて行い、過去の振り返り、現状の分析、そして将来の目標設定を行えるようにすることを目標とする。

## 2. 関連研究

### 2.1 研究歴に関する情報

比較対象とする研究者の置かれた状況の理解にはその研究者の状況に関する詳細な情報が必要となるが、既存の研究者情報サービスではこのような情報の入手は難しい。また、研究者へのインタビューにより研究者の生い立ちをまとめた文献がすでに存在しており [科学技術振興機構プレスルーム 05,

Brockman 08]、これらを他の研究者の置かれた状況を理解するためのリソースとすることも可能である。しかし、これらは研究である程度の成果を挙げた経験のある研究者の手によるものが多く、中には参考のできる情報はあるものの若手の研究者の視点でこれらの情報を消化することは難しい。また、一部はWebに掲載されている情報もあるが、時系列に沿って構造化されているわけではなく、直接研究歴を比較できないという問題点もある。以上を踏まえ、若手研究者の視点で参考になる情報、つまり若手研究者の研究歴そのものを蓄積した上で、研究歴比較が容易になるよう、時系列に沿って研究歴を構造化するという解決策が必要となる。

### 2.2 研究者キャリアデザインの技術的支援

本節では、他の研究者との研究歴比較を試みた研究について言及する。まず、[清水 06] は、女子学生・女性若手研究者向けに、彼女らのロールモデル（キャリアデザインの目標とする相手）となりうる女性研究者の学生時代の成績や研究業績を提示することで、このロールモデルを目標にキャリアが進められるシステムを構築している。しかし、目標の数値化によりロールモデルを発見しやすくなるものの、その目標に近づくためのプロセスについて明示的に考慮しているわけではない。そして、研究者のキャリアをパターン化し、これに基づき複数のゴールが設定されたゲームのプレイを通じて研究者キャリアの理解を促す試みもある [Kato 06]。第三者の視点から研究者のキャリアを理解するという点ではこのゲームは貢献しうるものの、パターン化の時点で研究者のキャリアに存在する多様性が失われるため、1. 節に挙げた背景を考慮すると多様化するキャリアパスを反映するにも限界がある。

### 2.3 研究歴比較

本研究では、他の研究者との情報交換の足場として研究歴の比較に注目する。まず [加納 06] は、自身の人生を「履歴図」として外化することで、自身の履歴を客観的に振り返ることができ、今後の自己の生き方のコントロールが行えるとしている。さらに、研究歴の比較とはすなわち自分自身の時間軸の中で他の研究者の人生をシミュレートするとみることでもできる。このような他者の研究履歴のシミュレーションは、キャリアデザインの中で自身の態度や行動の変化を促す可能性がある [Fogg 03]。

連絡先: 鈴木 聡, 青山学院大学 ヒューマンイノベーション研究センター  
150-8366 東京都渋谷区渋谷 4-4-25 ガウチャー 13 階  
151301  
ssv@hirc.aoyama.ac.jp

